

# 根本氏と豊かな感性と遊ぶワークショップ

早瀬 きみよ



根本氏(左)

と思っています。「と言。ワークショップには、赤ちゃん、中学生から七十代、既婚未婚交えて老若男女、職業も国籍も様々な人々が参加している。おおよそ一ヶ月、寺山修司の世界観を通じて、根本氏とワークショップ参加の人々と郡山市立美術館と遊ぶ。今この時に一緒に過ごした人と、貴重な体験を味わった。

ワークショップは三時間あまり。身体訓練や活元で自分や他人の身体に耳を澄ませ、呼吸法で、普段あまり意識しない呼吸の深さや、身体などの部分を使って呼吸をしているか、そこに空気が通っているかを感じた。発声法では、響きの気持ちのいい声・悪い声に気が付いたり、呼吸が身体のごとく触って声が出ているかを探求したり。そんな風にして一日目は、じつくりと身体というものに出席して遊んだ。二日目は、それに、いくつかの演劇メソッドが加わる。自分や、他人の動きをまじまじと見る。反射的に出た動きや言葉に、皆思わず笑いが漏れる。興味深かったのは、音が伝染していく「伝染箱」と「闇学」。一寸の光ももらさずに真っ暗闇をつくる「完全暗転」には特に気を配った。何じつ見え

「私が、いわゆる、寺山修司です。」寺山修司の仮面を被って登場した根本氏が自己紹介をし、毎週日曜三日間の演劇ワークショップが始まった。それは、寺山修司の世界観、その一部である「天井桟敷」その後生まれた「万有引力」という劇団、両劇団の主力俳優・演出家の根本豊氏の「ひとかけら」との出会いになった。「最終的に、四週目の土曜日と日曜日には万有引力特別公演への参加がありますが、このワークショップでは、お客さんに見せることよりも、皆さんと一緒に遊ぼう

ない真っ暗闇なのに、痛みもそっちのけで走り回ってみたい衝動に駆られた。皆で人を指差し見ながら、「二三」「三」と言う「噂のフォークロア」では、なんともいえない気分になったり。「演劇メソッド」らしくからぬ「演劇メソッド」。「メソッド」って言うのは「教わる」ものじゃなくて「掴む」ものだ」との言葉に、日常の出来事の影にチョコンと隠れている幾つかが、ふっと顔を覗かせた。「感じたことや、思っていることを言葉にするのは難しい。こうして話しているも実際は半分も伝わらない。書き言葉に直したら更にその半分も伝わらない。」ワークショップの中で何度か耳にした言葉。

一ヶ月の郡山通いは本当に楽しかった。今度はどんなことをするのだろう。一ヶ月間毎週ワークショップ。通う電車で見える夢も、帰るまでいい夢を見ているような感。目が覚めて、街を眺める。今という日常が、前より立体化して見えるようだ。テレビ放送のインタビューの中で、寺山氏を振り返り、「一緒にいると、何か早くでもないことが起るんじゃないかと、ワクワクした。」と語っていた根本氏。一ヶ月間の自分の「ワクワク

ク」を思い出した。このワークショップを通じて根本氏から、いろんな感覚で「寺山修司との出会い」という活きた美術品に、出会わせていただいたように思う。次に出会う時、「何かやりたいこと」を次々「こうかん」できるような、やわらかな遊び心を、持っていたいと日々思いつつ。白昼に隠れたまんまで何じつ見えていない、まだたくさんの「知らないこと」「分からないうこと」「伝わっていないこと」との出会いを楽しみに、ワクワクと暗闇を痛みもそっちのけで走り回りたい。そういう「みちなき荒野」に出会えたワークショップだった。



根本氏を中心に精神統一

## 「ノスタルジア 11.11.11

### 郡山市立美術館のイギリス美術展

平成20年10月11日から福岡県久留米市の石橋財団石橋美術館でスタートした同展は、郡山市立美術館の誇るイギリス美術を体系的に紹介する展覧会です。これは、郡山市立美術館と石橋美術館との交換展として実現した展覧会です(12月14日まで)。ほとんどの作品が館外初出品となる今回の展覧会。当館の常設展示でも、これだけ粒ぞろいの作品が勢揃いすることはありませんでした。久留米市の市民をはじめ多くの方々に、郡山の誇るイギリス絵画の魅力を十分にお楽しみいただける機会となればと願っています。



(当館主任学芸員 佐藤秀彦)